

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成21年7月17日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 一貫制博士課程5年

氏 名 長谷川 悟 郎

事業区分	平成20年度・長期派遣助成		
研究課題名	地域社会の多様性 ポルネオ・イバン農村社会における祭宴の再活発化をめぐるローカリズムの人類学的研究		
受入機関	マレーシア大学サラワク校 (UNIMAS) 東アジア研究所		
渡航期間	平成20年7月27日 ~ 平成21年6月13日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要 / 報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	2,100,000 円	
	使用した助成金額	2,100,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空費(国外)	270,000円
		鉄道、バス、船賃	230,000円
		宿泊料	1,300,000円
		日当	300,000円
	合計	2,100,000円	

研究課題名 / 地域社会の多様性 ボルネオ・イバン農村社会における祭宴の再活発化をめぐる
ローカリズムの人類学的研究

本調査では、マレーシア・サラワク州（ボルネオ島）カピット県区のイバン人農村集落に滞在し、人類学的視点から民族伝統の祭宴の今日的あり方について実証的データを収集することを主たる目的とした。渡航期間は、2008年7月より2009年6月の11ヶ月間である。本調査以前の2007年12月から3ヶ月間おこなった同地区における下調べから調査対象村はすでに決定していたのだが、4か月経った後の今回はその村ではある変化が生じていた。その変化とは、私のホスト家族が町へ居を構えることになり、町と村を頻りに往復する生活スタイルをとったことである。これによって、私はその家族と町と村の往来をともにするか、または村内にてホスト家族を変えるか、もしくは村を変えるかといった3つの選択肢を考えたが、対象村をふたたびカピット県区内にて選定し直すこととした。当村コミュニティは、いわゆるエリート村として地域住民から一目置かれ、これまでカピットにおける多くの政治リーダーを輩出してきた村である。祭宴が日常的に多く開催されており、私が調査対象地として選んだ経緯はそういった理由からなる。

私は考えあぐね、そしておよそ一か月の間、町のホテルに滞在しながら地域全体における祭宴の開催状況について地元民から聞き取り調査をすすめた。文献では、1980-90年代の研究において、イバンの伝統の祭宴開催は今日でも意外に根強く存在すると述べられており、私はそれを期待しつつ、聞き取りをしたが開催の情報が入ってこない。みな「今はもう行われていない」と、伝統文化は衰退したとの説明を語る。ところが、ほんの3年ほど前に、あるイバンの政治リーダーが盛大な祭宴を開催していることが分かった。さっそくその方を、町の上流部にある村落へ訪れてみた。

この方はかつて県区内の小学校に英語教師として永年勤務し、校長を務めあげた後に退職している。現在は60をすぎた年齢だが、米づくりを生業の基本としながら、プマンチャとよばれる政治役職をになう。プマンチャとは、各県区ごとにおかれた各民族の政治代表である。当祭宴の開催について、氏は、マレーシア連邦政府が映像記録を目的としすべての経費を支払うことで、雇われておこなったと説明した。本来では、本人は厳格なキリスト教であるため、イバンの祭宴などは開催することはないとのべた。およそ10-20年前からカピットのイバンの間ではキリスト教化が急速に進行し（1950年に初めての洗礼者があった）それと同時に祭宴もほとんど衰退したと説明するが、これはちょうど、祭宴開催は意外に根強いと研究者が報告した1980-90年代の状況から今日にかけての変遷を説明しているように思われる。

祭宴について、キリスト教にしたがうことで開催しない（できない）とは、イバンの間でごく一般的にのべられる説明である。ところが、自らをキリスト教であるといいつつ祭宴を開催していたのがA村であったⁱ。私が2003年に初めて訪れて以降、A村では頻りに政治分野やビジネスで活躍する男らが帰郷して比較的規模の大きい祭宴を開催している。そういった経験から、私が町滞在の間、役所の職員など地域の有力者らから聞きとりをおこなっていたⁱⁱ。しかし彼らも、一様に「もうない」「30年くらい前に行われたのが最後だ」など、祭宴は衰退しているとの見方に従い、開催情報はなかなか入ってくることはなかった。ところが、矛先を代え祭宴には欠かせない祈禱唄の職能的うたい手（lemangbang）に聞いてみたところ、大小あわせて数え切れないほどの祭宴にあちこちよばれて仕事をしてきたことを聞き

でした。大きなものだけをリストアップしてもらったが、彼が 1974 年にはじめて以来今年まで、カピット県区広域にて 17 度あった。彼はルマンバンとしてカピットの中でも著名な上級者（規模の大きな祭宴を担うことができる）だが、私は彼の仕事に 2 度同行し調査をおこなった。

さて「30 年くらい前に行われたのが最後だ」などとの町の者の見識はまったくいい加減なものだったことがわかるが、しかしなぜ一般的にそういう風に言い放つ風潮があるのか。世間の景気はこの数年活況だがⁱⁱⁱ、それにともない近年とくにカピット町上流域の村落全体が急激な向都移動を経験してきた。村落で開催されてきた祭宴とは、まさに時代の風潮に逆らったものとみなされているのかもしれない。

そして、ルマンバンの説明にしたがえば、祭宴の開催は特定の村にて行われるものではなく、開催を名乗る者があっておこなわれるという。開催を名乗るのは、彼のこれまでの経験でも、おおよそ州都クチンやカピット町など都市部において政治やビジネスで成功する富裕者である。私は結局カピットのなかでもとくに辺鄙な地域の 1 つといわれ、まだ多くの人びとが焼畑を生業の中心として生活している村へ入ることにした。町から片道小船で 4 時間、ガス代 1.5 万円（ガソリン代が高騰し深刻）、裕福な村ではなく、祭宴の開催はないと聞いた。

以上のような経緯を経て、報告者は「辺鄙な農村」へ入るに至ったが、入ってみると意外に町の者から聞いていた情報はすべて誇張された偏見であることがわかった。小さな規模の祭宴が日常的におこなわれていたこと、また祭宴は富裕者だけが開催するわけではないことなどが判明し、これまでの私自身の見識は大きく変えられた。当村では、かつて 20 年ほど以前まではかなり頻繁に祭宴は開催されており、また現在も下級のルマンバンがいた。私は滞在の最後の締めくくりとして、自らが最小規模の祭宴を一晚開催し、住民に対し感謝の気持ちを表した。とくにこの過程を経ることで、祭宴開催の意義をより深く理解することになった。

また大変興味深いのは、キリスト教徒であるとのべる彼らの間でも、伝統の神霊信仰は健在混同しており、町の者がのべる「キリスト教だから祭宴をおこなわない」といった説明は決して的を得ているものではないことを学んだ。キリスト教化の歴史も今後注意深く調査しながら伝統宗教について理解していきたい。

これらの調査成果を本報告では詳しくのべることはできないが、なるべく早急に論文にまとめて公表していく。

以上

ⁱ これは、かつて 1950 年に洗礼をうけたものの、その後もイバンの生活スタイルに重きをおいた村の草分けであるサラワク・イバンの最高首長を務めた Koh から説明を試みることもできる。

ⁱⁱ それはまた私自身のイバン語運用能力が乏しかったこともあり、そんな私にとって、とくに英語の通じる役所職員らは手っとり早い情報提供者であった。またこのカピットにおいて、外国人に対して自分たちの「文化を説明する」ことは見識ぶった高尚な知識人に許された所作といえる。

ⁱⁱⁱ 2008 年 12 月あたりから世界的な経済不況により、カピット最大の産業である森林伐採業が鈍化したことで現場作業人員の自宅待機がかなり増加した。